スラブ・ユーラシア研究センターニュース　季刊　2024年 173号

SLAVIC-EURASIAN RESEARCH CENTER NEWS　No. 173 October 2024

研究の最前線

NYU ×生存戦略研究国際ワークショップ「ブリヤーチヤ：シベリア・ロシア・ユーラシアの架け橋」開催される

10 月 7 日と 8 日に、ニューヨーク大学ジョーダン・ロシア高等研究センターとスラ研の生存戦略研究ユニットの共催で、ブリヤートを中心にモンゴル世界を考える国際研究集会を組織しました。これは、主催者のタチヤナ・リンホエヴァ氏が、ちょうど一年前にジョーダン・センターで開いた会に続くもので、今回はロシアとアジアの研究者が時差を気にせずに参加できるように、スラ研が共催を受け入れて実現しました。スラ研ではあまりない試みとして、3 月 8 日から 5 月 15 日までペーパーの公募を行い、30 名以上の申し込みのうち 13 名の報告者を選定して、テーマに応じて 5 つのパネルを設けました。「ワークショップ」と銘打っているように、この会は当初、報告者が互いのペーパーを読み合って討論に専念する内輪の会を想定していました。実際、報告者の持ち時間は各 10 分、討論者は各 10 分で、残りの 1 時間をすべて議論に費やすという形式で進行しました。とはいえ、やはり議論はオンラインで公開したほうがよいという判断で、スラ研の大会議室と Zoom の両方での開催となりました。期待に違わず、現地参加とオンラインを合わせて、延べ 100 名近い参加がありました。

ワークショップでの議論を終えた参加者

中央ユーラシアの歴史をムスリム中心に眺め

がちな筆者には、このワークショップの議論が他の専門家を寄せ付けない程度に専門的で特殊なものになることが懸念されましたが、一旦、報告者と討論者の発言が始まると、そのような心配は霧散しました。パネル 1 は、露清国境のモンゴル系の人びとの婚姻と通商に着目するもので、それぞれの帝国権力が何を管理し、管理しないのかという問いが立てられました。ローカルな史料に分け入ると、帝国の権力の作用が後景に退いて見えるというのがかえって、帝国とは何かを考える重要な視座を与えているように思われました。パネル 2 は、人肉食に関する言説の生成と改宗がもたらす社会階層の再編という視座からロシア権力の深化と限界を論じるものでした。この二つの論点は、筆者の専門とするヴォルガ・ウラル地域でも研究されてきましたので、大いに啓発されました。また、1911 年にキエフでユダヤ人が行ったとされる儀礼殺人（いわゆるベイリス事件）も、人肉食言説と通底するものとして考えられるようにも思われました。パネル 3 は、ロシアとチベットを結ぶ仏教世界の構築にブリヤート人が果たした役割が議論されました。これは筆者には、帝政末期にロシアとイスラーム世界を結んだタタール人の立ち位置を想起させました。交通機関の発達でメッカ巡礼が振興すると、各地で多彩な様態だったイスラームの信仰がメッカ中心に標準化してくるという議論を念頭に置くと、果たして仏教もまたラサ中心のものに変容したのではないかと想像が膨らみました。パネル 4 は、パネル 3 と合わせてみると、国境で隔てられたブリヤート人が各時代のテクノロジーに順応して、抑圧的な国家権力に抗して自分たちの精神文化を守り、発展させている様子を鮮やかに伝えていました。また、シャーマニズムが仏教や正教会の影響で組織化を志向し、科学的無神論の中で自らの輪郭を獲得する様は、世俗化とは何かという大きな問いにつながっているように見えました。パネル 5 は、外モンゴル、ブリヤート、内モンゴルのナショナリズム、主権、国家建設を議論しました。20 世紀初頭の激動の時代に三地域に跨る越境的な運動が、外部世界から学びながら宗教、主権、独立、市民権をめぐって議論を展開させながらも、結局はソ連、モンゴル、中国の国境に閉じ込められていく動態が浮かび上がりました。リンホエヴァ氏が筆者との会話の中で、この地域における「危機の連続体」（ピーター・ホルキスト）は 1911 年から始まるのではないかと問題提起していたのが印象に残りました。一言でいえば、このワークショップが設定した「ブリヤーチヤ」は、特殊でありかつ普遍的なのだと痛感しました。

モンゴル系の諸民族は、現在に至るまで大国の狭間で生き残るべく懸命に闘っています。ブリヤート人は、ロシアのウクライナ侵攻で最も犠牲を払っている民族の一つであり、内モンゴルの人びとは中国の強圧的な政策に苦しんでいます。9 月初頭のプーチンの訪問でモンゴル政府は国際刑事裁判所の判断に反してプーチンを逮捕せず、国際的な非難を浴びました。しかしそこには、ロシアと中国の間を立ち回らなければならない苦境、かといって欧米の助けはもはや信用ならないという苦悩が表れています。モンゴル世界の過去と現在を考えることは、従来の国際秩序が崩壊している現在を生き延びる術を考えるすべての人に必要なように思われました。まさに、スラ研が推進している生存戦略研究の縮図でした。リンホエヴァ氏はじめ参加者も、この会をどのような形で続けていくべきなのか、議論していました。管見の限りでは、学会という形で専門家を囲い込んでしまうのではなく、外部の多様な専門家も議論に参加できるような形を維持することで、隣接分野に広範な相乗効果を引き起こせるように思われました。［長縄］

International Workshop with New York University
Buryatia: Bridging Siberia, Russia, and Eurasia

Venue: Room 403, Slavic-Eurasian Research Center, Hokkaido University

October 7, 2024
10:00- 10:10 Introduction
Linkhoeva, Tatiana (New York University, USA)

10:10-11:40 Panel 1
Battsengel, Natsagdorj (Mongolian Academy of Science, Mongolia) "Cross-border Marital Relations between the Mongolian Subjects of the Manchu and Russian Empires in the 18th Century"
Zhanaev, Ayur (University of Cambridge, UK) "Transcultural Networks at the Twilight of Empires: The Case of Tsogto Badmazhapov (1879-1937) and the Alashaa Banner of Inner Mongolia"【Online】
Discussant: Orluud, Zumber
Chair: Linkhoeva, Tatiana

13:30-15:00 Panel 2
Kudachinova, Chechesh (Freie Universität Berlin, Germany) "Colonialism and the Construction of Indigenous Cannibalism in Late Imperial Siberia"【Online】
Tsyrempilov, Nikolay (Nazarbayev University, Kazakhstan) "Christianization of the Buriats and the Dymbilov Affair, 1841-1848"
Discussant: Inoue, Takehiko
Chair: Buck Quijada, Justine

15:30-17:30 Panel 3
Inoue, Takehiko (Osaka Kyoiku University, Japan) "Bridging Eurasian Buddhist Societies: Khambo-lama Choinzon-Dorzhi-Iroltuev's Grand Tour at the Turn of the Twentieth Century"
Garri, Irina (Institute for Mongolian, Buddhist and Tibetan Studies SB RAS, Ulan-Ude, Russia) "Following the Journey of Gombozhab Tsybikov"
Namsaraeva, Sayana (University of Cambridge, UK) "Material Heritage to Share? Transborder Social Life of a Sandalwood Buddha through Time and Space across Asia"
Discussant: Battsengel, Natsagdorj / Tsyrempilov, Nikolay
Chair: Orluud, Zumber

October 8, 2024
10:00-12:00 Panel 4
Khuasai, Baigal (Institute for the Study of Nomadic Civilizations, Mongolia) "Narratives of Resilience: Transformation of Üliger in the Buryat-Mongolian Cultural Revitalization in Inner Asia"
Dondukova, Galina (Institute for Mongolian, Buddhist and Tibetan Studies SB RAS, Ulan-Ude, Rus-

sia) “*The Epic of King Gesar / Geser*: The Buryat Versions in the Context of Global Studies of the Epic”
Buck Quijada, Justine (Wesleyan University, USA) “The Academic Study of Buryat Shamanism: Changing Roots of National Tradition in the Late Soviet Period”
Discussant: Zhanaev, Ayur / Kudachinova, Chechesh
Chair: Tsyrempilov, Nikolay

14:00-16:00 Panel 5
Creech, Griffin (University of Pennsylvania, USA) “The Unmaking of Buryat Citizenship in Northern Mongolia, 1928-1930”【Online】
Orluud, Zumber (Showa Women’s University, Japan) “Mongolian Terms for “Sovereignty”: Focusing on the Material from Mongolia and Buryatia in 1910-1920”
Borjigin, Buren (Hokkaido University, Japan) “Mongolian Nationalism and Intellectuals in 1911: The Case of Almas Ochir and Haisan”
Discussant: Buck Quijada, Justine / Namsaraeva, Sayana
Chair: Battsengel, Natsagdorj

Organized and sponsored by
Jordan Center for the Advanced Study of Russia, New York University
Platform for Explorations in Survival Strategies & Research Unit for Ukraine and Neighboring Areas at the Slavic-Eurasian Research Center, Hokkaido University
NIHU Transdisciplinary Project “Area Studies Project for Northeast Asia”

SRC 冬期国際シンポジウムの予告

2024 年 12 月 18 日～ 19 日に、国際シンポジウム『スラブ世界における言語、ネイション、標準化：類似と差異』が予定されています。今回のシンポジウムはカンザス大学教養学部（米国）、ザグレブ大学哲学部（クロアチア）との共催で、一部の報告者以外は全て対面で行われます。

主要なスラブ諸語の標準化は民族としてのアイデンティティや国家性などの問題と相まって 19 世紀に大きな変化を見せます。その時代背景から一定の傾向に共通性はありますが、その一方で違いも多く見受けられます。それらは今日の言語状況に様々な形で表れ、また政治問題や国家間の対立にもなっています。これらは「国家＝国語＝国民」というよく知られた一般化と関連づけられることが常ですが、今日の言語状況も踏まえ、スラブ諸語を題材にこの一般化を再考することを目的とします。

今回は、スラブ標準語成立前史、戦争の文脈における東スラブ世界、旧セルビア・クロアチア後継言語標準化再考、多中心性と多層性の 4 パネルに加え、3 つの基調講演および特別研究報告が予定されています。プログラムは 12 月上旬に公開されます。［野町］

2024 年 JCREES サマースクール開催報告

スラブ・ユーラシア研究センターは、8 月 28 日・29 日に、JCREES（日本ロシア・東欧研究連絡協議会）との共催で「スラブ・ユーラシア研究サマースクール」を開催しました。JCREES とは、ロシア・東欧学会、日本ロシア文学会、ロシア史研究会、比較経済体制学会、日本スラヴ学研究会によって構成されるコンソーシアムで、設立以来、本センターが事務局を担当しています。このサマースクールは、2021 年にロシア・東欧学会との共催で組織したことに端を発し、その精神を引き継いだ JCREES との共催で今年は 3 回目、スラブ・ユーラシア研究センターとしては通算 4 回目の開催となりました。

本年度のサマースクールには、沖縄から北海道まで、日本全国各地の大学から 37 名の応募があり、選考の結果 21 名の学生（学部 3 ～ 4 年生 10 名、修士課程 7 名、博士課程 4 名）が採択されました。サマースクールは例年通り 2 部構成で、午前中は JCREES 所属の各学会から派遣された講師およびセンターの講師計 6 名による講義、午後は学生発表となりました。本年度の講師は、ロシア表象文化論（ロシア文学会）、東欧政治学（ロシア・東欧学会）、東欧文学（日本スラヴ学研究会）、バルカン地域言語学（センター）、ロシア経済（比較経済体制学界）、ロシア史（ロシア史研究会）の専門家が担当し、講義後の討論には、参加学生が積極的に参加しました。午後の学生研究発表も大変充実したものとなり、講師や学生による質疑応答では熱気に満ち溢れた討論が展開されました。本サマースクールの大きな目的は、学生が自身の専門分野への知見を深めることは無論のことですが、それ以上に分野や地域を超えた様々な広がりに目を向けて研究に対する視野を広げ、積極的に意見交換することで学際的な広がりの重要性を実感することにあります。講義や発表後の質疑応答や休憩時間の意見交換の様子などから、この目的は大いに達成できたようです。

参加学生や講師の一部は、自由時間を利用して、本学が所蔵する世界的に見ても特筆に値するスラブ・ユーラシア研究に関わる蔵書類の調査や資料収集を行ったり、担当講師ではないセンター教員に論文・進学指導を求めて滞在を延長したりなど、サマースクール以上の成果も得られたようです。［野町］

サマースクール 2024 参加報告

柿本　遊季（明治大学文学部 4 年）

8 月 27 日、28 日の二日間にわたりサマースクールが開催され、スラブ・ユーラシア文化圏への関心という共通項を持ちながらも、多種多様な分野を専門とする学生が集まった。参加学生の発表に加え、各研究の第一線で活躍する研究者による講義が終日行われ、1 日目の終わりには参加者同士の自由な交流の機会も設けられた。密度の濃い二日間であった。

私自身は 20 世紀初頭のロシア演劇に関する発表を行ったが、ロシア文化に関心を持ち始めてからまだ日が浅く（ほんの数ヶ月前にロシア演劇を専門にしようと決めたばかりだっ

本田講師の講義の様子

た)、大学で専攻している演劇学は古今東西の演劇が研究対象になるため学内でスラブ・ユーラシア文化に触れる機会は限られており、発表も講義も恥ずかしながら初めて知る内容ばかりであった。まだまだ自分には知らないことが多い、ということを自覚できたこと自体が大きな学びであった。知見を広げる、という意味で勉強になったのはもちろんのこと、これまで関心を持ってこなかった話題や専門領域の中に、思わぬ形で自分の研究分野との接点を見つけられたこともまた、このサマースクールに参加してこそ得られた発見であった。また大学の中にいると、演劇学に関心のある学生と接する機会には恵まれているが、ロシア演劇、あるいはロシア文化に関して意見を交わしながら思索を深めることは難しい。そのような普段の大学内での発表とは異なり、サマースクールでは自身の発表に対して、演劇学とは異なる様々な角度から指摘や意見をいただいた。自分の発表に対して多角的なフィードバックをもらうことは私にとって初めての経験であり、視界が一気に広がるような感覚があった。参加者が分野で限定されないイベントであったからこそ、普段置かれている環境の中に居続けると凝り固まりがちな思考を柔軟にし、視野を広げることが可能であったと思う。

さらに参加者による充実した内容の発表だけでなく、その研究態度からも大いに刺激を受けた。学部生の私にとって、同世代の様々な分野で研究を深めている学生と交流する機会もまた、初めての経験であった。参加した学生は皆自身の関心分野に対する探究心が高く、その探究心は発表の中で丁寧なアウトプットとして表れていた。特に大学院生の発表による質の高い研究内容には感銘を受けた。また発表外でも学生同士の議論は活発に行われており、発表はさることながら、自由時間に行われる対話が一層サマースクールの時間を充実したものにしていたように感じる。そのような交流の中での同世代の姿に触発され、自分は今後どのように研究に向き合っていくのか、自身の研究態度を見つめ直すきっかけにもなった。このような経験は、大学内だけの学びでは得難いものであろう。学部生の今、この充実した二日間を過ごせたことは幸いであった。この経験を踏み台として、ますます自分の研究に力を入れていきたいと意気込んでいるところである。

ロシア（語）だけではない、スラブ・ユーラシア研究の魅力：2024 年度サマースクールに参加して

安齋　篤人（東京大学大学院総合文化研究科博士課程）

筆者は、令和 6 年 8 月 28 日から 29 日に開催された 2024 年度 JCREES スラブ・ユーラシア研究サマースクールに、旅費支援枠で参加させていただきました。普段はポーランド、ウクライナを中心とするユダヤ史を学んでいる筆者にとって、専門分野の異なる専門家や学生の発表を聞き、議論するサマースクールの学際的な雰囲気は、大きな刺激になりました。

2024 年度サマースクール参加者、講師、スタッフ

まず午前中には、計６人の先生方による、歴史や文学、言語学、経済学などの多様なテーマの講義が行われました。参加学生は、講義を通して、スラブ・ユーラシア研究の最前線に触れたり、あるいはこれまでの同地域に関する本邦の研究や翻訳など文化活動の厚みに触れることができました。講義後の質疑応答も活発で、先生方との議論を通して参加者の理解がより深まったと筆者には感じられました。午後は、参加学生による個人発表で、こちらも政治や歴史、文化･芸術、言語など多彩なテーマに富んでいました。発表会場が二か所に分かれていたために、もう一方の会場の発表も聞きたかったと残念がる聴衆の参加者もいたほどでした。発表者の中には、学部生の段階で既に意欲的なテーマに取り組んでいる方も多く、そうした発表者の方々が、更に一流の専門家から、貴重なコメントをその場でもらえるのを見ると､博士課程で今回初めてサマースクールに参加した筆者には、何とも羨ましいと思われました。もちろん、筆者も自身の発表で、学生や先生方から鋭い内容の質問や指摘を頂き､今後の研究の糧とすることができました。なお２日間に渡る発表が、滞りなく進行したのは、多忙のところ、ご協力くださったスラブ・ユーラシア研究センターのスタッフの皆様のおかげであり、深く感謝いたしております。

研究の糧といえば、サマースクールの期間前後に、北海道大学附属図書館やスラブ・ユーラシア研究センターの蔵書を閲覧する機会を頂けたことも大きいものがありました。筆者の専門に限れば、ロシア語はもちろん、比較的なマイナーなポーランド語やウクライナ語による図書や雑誌といった文献資料をこれほど多く所蔵する国内の大学や研究機関は他には中々ないと思われます。札幌滞在中、筆者は書庫の迷宮のように入り組んだ通路を行き来し、資料の渉猟に明け暮れる毎日を送りました。スラブ・ユーラシア研究センター図書室のスタッフの方は、資料の所蔵場所が不明な際に、進んで探してくださり、大変助かりました。この場を借りて御礼を申し上げます。今回閲覧した膨大な資料のおかげで、筆者の博士論文の執筆も現在、大いに進捗しております。

発表の合間の休憩や懇親会では、異なる専門の学生や先生方と交流する機会を得られ、専攻する言語や地域は近くとも､未知のテーマや知識がまだまだ多いことを教えられました。また、スラブ・ユーラシア関連の専攻がない大学から参加された方からは、特に今回は貴重な機会になったと伺い、改めてサマースクールの意義を感じられました。暑さの厳しい他所を離れ、柔らかな日差しの晩夏の北海道で、スラブ・ユーラシア学を志す学生が探究心を存分に高められるサマースクールが、今後も継続して開催されるのを願っています。

「東ユーラシア研究」プロジェクト（EES-SRC）

「東ユーラシア研究」プロジェクト（EES-SRC）の YouTube チャンネルでは、前号のセンターニュースでの報告から、4 つの動画を新たに公開しています。すべて現在の国際情勢・政治動向に沿ったテーマであり、高い関心を集めています。順にご紹介します。

2024 年 7 月 5 日に SRCW/CGR セミナー「人類を取り巻く地球環境：（プラネタリー）バウンダリーズ、ヘルス、リスク」が開催されました。UBRJ と EES も共催です。講演者は、春日文子氏（長崎大学）、進行役・コメンテーターは岩下明裕氏（SRC）でした。動画の再生回数は公開から 2 か月で 500 回を超えています。

https://youtu.be/ifNchonprE0

2024 年 7 月 23 日、オンラインで SRCW/EES 実社会のための共創セミナー「石丸現象とメディア：ポピュリズムか、絶望か?」が開催されました。講演者は鈴木英生氏（毎日新聞オピニオン編集部）、司会・討論者は岩下明裕氏（SRC）でした。このセミナーは 7 月 7 日に行われた東京都知事選挙を受けて企画されたものであり、映像を公開して 3 日で再生回数は 1000 回を超えています。

https://youtu.be/lls4N-06624

2024 年 9 月 9 日には、SRCW/EES 実社会のための共創セミナー「相互依存と平和：経済は政治を超えるのか?」が開催されました。報告者は星野真氏（駒沢大学）、コメンテーターは桑波田浩之氏（長崎大学）でした。

https://youtu.be/2SRJ2Aqy6U4

2024 年 9 月 20 日には、SRCW/EES 実社会のための共創セミナー「核兵器不要の世界に向けて」が開催されました。報告者は樋川和子氏（長崎大学）、コメンテーターは小泉悠氏（東京大学）でした。動画の公開から 2 週間で、再生回数は 500 回を超えました。

https://youtu.be/VKePcUpIVlA

［松本（祐）］

グリーンランドにおける資源開発に関する現地調査

北極域研究加速プロジェクト（ArCS II）では、社会文化課題の 3 人のメンバー（田畑伸一郎、徳永昌弘、原田大輔）が 2024 年 9 月 1 日から 10 日間ほど、コペンハーゲン（デンマーク）とヌーク（グリーンランド）を訪問し、資源開発とその地域経済・社会への影響などに関する調査を行いました。この調査には科研費の調査を行うため大西富士夫さん（国際政治課題）も加わりました。

グリーンランド経済は、これまで海産物の輸出に頼ってきましたが、デンマークへの依存を減らすための切り札として、埋蔵量が豊富であると見られている鉱物資源開発に大きな期待が寄せられています。石油・ガスの開発も見込みがあると考えられていましたが、2021 年の政権交代

の後、グリーンランドは脱炭素の方向に大きく舵を切りました。今回の現地調査は、このような政策転換の背景を理解し、石油・ガスに代わって有望視されているレアアースなどの開発の現状や課題を調査することを主要な目的としました。

我々はまずコペンハーゲンに 2 日間ほど滞在して、デンマーク国際問題研究所、コペンハーゲン大学、オールボー大学の専門家から、グリーンランドをめぐる状況やデンマークとの関係についての話を聞きました。また、これまでロシア・旧ソ連関係を担当されてきた元欧州局長の宇山秀樹氏が現在、在デンマーク日本大使を務められ、昨年 11 月にグリーンランドを訪問したことを知ったので、大使からも話を聞きました。

我々は、大西さんを除いて、今回が初めてのグリーンランド訪問だったので、知り合いもおらず、どうやって面談をアレンジしようかと思っていました。幸い、原田さんが会議で知り合ったグリーンランド自治政府代表・公使のヤコブ・イスボセツセン氏がグリーンランド自治政府の首相府儀典長ヤコブ・ローマン・ハード氏と通商産業・鉱物資源・司法・男女平等省大臣トーマス・ラウリトスン氏を紹介してくれました。特にハード氏のおかげで、2 日間で 9 件ほどの面談（上記の省のほか、商工会議所、天然資源研究所、ヌナ・グリーン社など）を行うことができました。

これらの面談やヌーク市内の視察を通じて私が学んだことを次の 3 点にまとめてみました。第 1 に、先住民であるイヌイットが人口の 90％を占めるということを何人かの方から聞き、実際に、外見からも、先住民とそうでない人をかなりの程度区別できるような印象を持ちましたが、先住民とそれ以外の住民の数を示すような統計は存在しないことを知りました。それほど「融合」が進んでいて、生活上の区別がないのだろうと思いました。先住民を含む一体としてのグリーンランド人が政府を形成していることから、資源開発において先住民の土地の権利の問題が発生しないことを知りました。このことは、先住民に対する補償のあり方をベネフィット・シェアリングとして議論しなければならない北極の他の国・地域とは大きく異なっているように思いました。

第 2 に、政府・企業が 2021 年から脱炭素の方向に強い意志を持って進んでいることが強烈に印象付けられました。この背景には、グリーンランド氷床の融解加速化に象徴されるような気候変動の進展や、欧州等における脱炭素化の動きの影響もあるようですが、グリーンランドで石油・ガスの開発が見込まれていた北東部においては、気象・地理的な要因により、開発が非常に高コストとなり、時間も要し、巨額の投資も必要となるという現実的な問題が大きく影響していることがよく分かりました。輸送問題 1 つをとっても、カナダやノルウェーとは違うのだと言われた人が複数おられました。レアアースの開発の場合は、可能性があるのは北東部だけではありませんが、それでもコストの問題は大きくのしかかっているようでした。

第 3 に、首都のヌークしか見ていないので、偏った見方かもしれませんが、生活水準は思っていた以上に豊かであるという印象を受けました。コペンハーゲンでは、円安と実質賃金低下に苛まれる我々日本人は、ホテルやレストランの値段の高さに苦しみましたが、それはヌークでも変わりませんでした。レストランでは、我々は少しでも安いものがないかとメニューの隅々まで探すのですが、ブルーワーカーを含めた地元の人たちはごく普通に食事をしていました。グリーンランドの公式統計によれば、2022 年の平均所得は都市で 29 万クローネ（約 640 万円）、村落で 19.5 万クローネ（約 430 万円）となっています。所得税率は 42 ～ 44％ということですが、日本よりは豊かに思えます。ただし、国家財政歳入の 4 割余りがデンマークからの補助金、就業者の 4 割余りが公務員ということです。水産業以外の産業を育成しなければならないという考えを政府や企業の多くの人から聞きましたが、それももっともだと思いました。

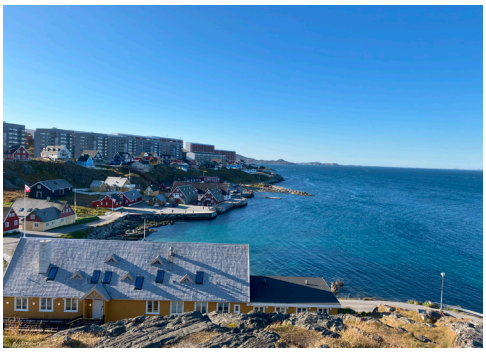
コペンハーゲンでも、ヌークでも、日本より生産性が高いのは、従業員を減らしている、あるいは従業員が少ないからではないかと思いました。以前にフィンランドでも同じことを思いました。人件費が高いから従業員を減らすのか、従業員が少ないから生産性が高く現れるのかは、何とも言えませんが、キオスクや小さなカフェを 1 人や 2 人で回しているのは、日本とは違うという感じです。日本のようなきめ細かいサービスやパンクチュアリティは期待できませんが。

水産業やレアアースなどの鉱物資源開発と並んで期待されているのが観光業ですが、大型の国際便が飛べるようにするためにヌークの空港の拡張工事が行われている最中でした。今年 11 月に完成すると聞きました。現在は、ヌークとコペンハーゲンの間の直行便はなく、レイキャビク（アイスランド）あるいはグリーンランド国内のカンゲルルススアーク経由などしかありません。我々の帰路においては、ヌークからカンゲルルススアーク行きの飛行機が直前になって欠航となりました。天候も問題なかったし、機材繰りというのも考えにくいので、何らかの理由で、乗員などのスタッフが足りなくなったのではないかと疑っています。人手が足りていないような印象を各所で受けました。

遅れや欠航は頻繁にあるようで、代替ホテルの提供や食費補助のクーポンの配布などは、手慣れた様子で進められました。この影響で、カンゲルルススアークの空港ホテルに 1 泊することになり、空港近くのツンドラツアーにも参加することになりました。ヌークで参加したフィヨルド流氷ツアーも含めて、確かに観光資源は豊富であることを実感しました。

脱炭素の方向で、どのようにグリーンランドが進んでいくのか、今後も注視していきたいと思っています。［田畑］

面談のワンシーン



ヌークの街並み

横山恒子オリガ先生およびブレント・ヴァイン先生のセンターご訪問

8 月 14 日～ 21 日にカリフォルニア大学ロサンゼルス校名誉教授の横山恒子オリガ先生・ブレント・ヴァイン先生ご夫妻がセンターに滞在されました。お二人とも世界的な言語学者で、同大学で卓越教授の称号を持たれています。横山先生はロシア語研究、特に（機能的）統語論や語用論の研究、談話分析で成果をあげられています。厳密なイントネーションの分析に基づいたロシア語の語順研究は、独自の言語理論への構築も実現するなど、ロシア語研究に留まらない大変高度な研究として知られています。横山先生のご関心領域は非常に広く、

スラブ文化論も広くカバーされ、最近は 19 世紀のロシアの農民の手紙の詳細な分析を行っておられます。その成果は言語研究や文献学に留まらず、ロシア文化研究、ロシア史など多くの領域に貢献する研究と評価されています。ヴァイン先生は歴史言語学の著名な専門家で、印欧語比較言語学で大きな成果を出されています。とりわけギリシア語およびラテン語の研究で知られていますが、これらの古典言語を題材とした文体論や韻律研究にも取り組んでおられます。なお、センターのウルフ研究員は、ハーバード大学で横山先生にロシア語の手ほどきを受けたそうで、センターとは不思議なご縁があるようです。

今回のご滞在の目的は 3 つありました。それらは、1. 横山先生の蔵書・資料のご寄贈、2. 今後のセンター運営へのご協力に関する打ち合わせ、3. 両先生の講演会でした。横山先生がご寄贈されるのは、先生の膨大なご蔵書だけではなく、戦前にハルビン市副市長を務められ、また戦後にはソ連に抑留された経験を持つ山口民治氏が残した膨大な史料が含まれます。今回はその一部が寄贈され、横山先生は情報資料部の兎内氏とともに資料の分類と整理の方法の打ち合わせを行いました。2 に関しては、詳細が決まり次第、改めてセンターの媒体を通じてご案内したいと思います。3 の講演会ですが、8 月 19 日に組織され、ヴァイン先生は『印欧言語学とは何か？なぜ気にかける必要があるのか』という題目で、印欧語比較言語学の成立から、19 世紀末のソシュールの研究に端を発するラリンガル理論の重要性、また韻律研究や神話などについて非常に丁寧な解説がなされました。横山先生は二つの講演をされ、それぞれ『日露混血児が生きた戦後のハルビン』、『話者から言語学研究者へ』という題目でした。前者は横山先生の実体験に基づくハルビンでの多言語多文化の日常生活、さらに敗戦で将来が見いだせない当時の状況を回想するもので、その生の声は大変衝撃的かつ興味深いものでした。後者は、横山先生のハルビン以来の多言語使用の実践から言語学への関心への展開について論じられました。横山先生は新天地アメリカで育児もされながら、ハーバード大学で最先端の研究を推進され、世界的な学者へ駆け上がっていく様子を生き生きと

ブレント・ヴァイン先生

横山恒子オリガ先生

描かれましたが、こちらもやはり固唾を呑んで拝聴する内容でした。

横山先生のご蔵書・資料のご寄贈は何度かに分けて行われるため、来年以降も資料整理・説明のためにセンターをご訪問くださるとのことです。［野町］

山口民治氏の資料を整理する横山先生とセンターの兎内氏（および、講演の準備をするヴァイン先生）

ウクライナ公共放送局 Suspilne Ukraine の代表団の訪問

10 月 6 日の夕刻に、JICA の委託で NHK が研修に招待したウクライナ公共放送局の代表団 19 名がセンターを訪問しました。この研修は、公共放送が自然災害や戦争のような非常事態でどのように信頼に足る有益な情報を発信し続けられるかのノウハウを交換するものだそうです。NHK も、東日本大震災などを契機に南海トラフ地震や首都直下型地震に備えて、東京の本部の機能が麻痺しても、大阪などに機能を移せるような仕組みを整えているそうで、ウクライナ公共放送局にその技術を伝えると同時に、ウクライナの戦時体制から NHK も学ぶことが多いそうです。

代表団の一人の報告によれば、全面戦争になるとは夢にも思わなかったものの、すでに 2014 年から JICA と NHK と協力体制を築き備えがあったおかげで、2022 年 2 月のロシアの侵攻から数日後には放送局の機能をリヴィウやザカルパッチャに移すことができて、「生き延びることができた」のだそうです。別の報告者は、信頼に足る有益な情報を発信するだけでなく、人びとの精神的な高揚を支え、ロシアの流す嘘と闘うために、歴史など教育番組に力を入れていると話していました。さらに、ハルキウ支局長が登壇し、防空警報を再生した時、我々も緊迫感に包まれました。戦前、ハルキウ支部のアプリ「テレグラム」に登録する人は 2000 人ほどだったが、今や 10 万人が登録し、防空警報などの情報を得ているそうです。ハルキウ支局はロシア軍の戦争犯罪の証拠も集めているようです。支局長が、市民がどのように銃を取って前線に向かってい

Suspilne Ukraine による報告

るか、どのように人びとが薬局を守り、町の医学生が診療所を開設しているかを熱っぽく語っていると、ハルキフ出身の通訳の女性は涙を流していました。

センターの大会議室には日曜の夕刻にもかかわらず院生や教員が多く訪れ、代表団を含め 40 名近くが、戦時下の生々しい報告に聞き入りました。［青島・長縄］

2024 年度中村・鈴川基金奨励研究員の決定・滞在

2024 年度の中村・鈴川基金奨励研究員は以下の 3 名（五十音順）に決定しました。全員夏の間にセンターに滞在し、充実した研究活動を行いました。［仙石］

李　博聞	京都大学大学院 文学研究科 博士後期課程 2 年	2024. 8.10 ～ 8.25	1930 年代前半のニコライ・ザボロツキーの詩作におけるツィオルコフスキーの宇宙哲学と未来像の受容：急進主義の農業政策と未来主義的な詩作の狭間で	安達
宇野　真佑子	東京大学大学院 総合文化研究科 地域文化研究専攻 博士課程	2024. 7.25 ～ 8.10	1990 年代クロアチアにおける第二次世界大戦の記憶と民族間関係	ヤスミナ
奥田　弦希	東京大学大学院 人文社会系研究科 博士課程	2024. 7.1 ～ 7.20	1908 年のボスニア併合以降の時期を中心とする、ハプスブルク帝国のムスリムに対する政策	長縄

第 4 回百瀬フェローの決定

百瀬宏・津田塾大学名誉教授のご寄付に基づき設立された百瀬基金による、第 4 回百瀬フェローがこの度、決定しました。百瀬フェローシップは、スラブ・ユーラシア地域を研究するテニュアを目指しているポスドクの方を対象とした研究奨励制度です。このたびはセンターで慎重に審議した結果、坂田敦志さんに 2024 年 10 月より、百瀬フェローの称号が与えられることになりました。ひきつづき、多くの方々の応募をお待ちしています。［岩下］

選考講評

採択者：坂田　敦志（さかた　あつし）

研究課題名：2010 年代後半から 2020 年代前半にかけてのチェコ共和国における排外主義的言説およびナショナル・アイデンティティの再編プロセスについての研究

坂田敦志氏の研究は、文化人類学的な手法に依拠しながら、2010 年代半ばの「難民危機」以降にチェコにおいて形成された排外主義的な言説・情動が、2020 年代前半のロシアによるウクライナ侵攻以降の政治劇文脈の中でいかに再編されつつあるか、そしてその中でチェコのナショナル・アイデンティティがいかに組み替えられつつあるかという問題について検討しようとするものである。ここではかねてから議論されてきた「西欧への回帰」の物語と

排外主義的言説とがいかなる形でぶつかり合い、またその過程においていかなる形で再編されてきたかについて歴史的経緯を踏まえつつ分析を行うことを試みようとするもので、これによりチェコのみならず現在の中東欧諸国の政治のあり方、あるいは欧州全体の地政学的な状況を広く捉えようとする試みが評価の対象となった。方法論がやや抽象的で具体的にいかなる形で研究を進めていくのかという点での疑問は提起されたが、この点はこれから研究を開始するという点でやむを得ないところもあり、研究を実際に進めていく中で具体化されていくものと想定される。優れた成果が刊行されることが期待される。

採用にあたっての抱負

坂田　敦志

この度、第 4 回百瀬フェローシップにご採用いただき、大変光栄に存じます。審査にあたられた先生方、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

私はこれまで、1989 年に「ビロード革命」を経て社会主義体制から資本主義体制への転換を遂げたチェコ共和国において、ナチス・ドイツによる占領時代（1939 年～ 1945 年）や社会主義時代（1948 年～ 1989 年）にまつわる記憶が、1989 年以降の新たな秩序のもとでの人々の日常生活にどのような影響を与えてきたのかを、当国の政治・文化事象を題材に明らかにしようと試みてまいりました。

この試みは大きく 2 つの研究分野に位置づけられます。1 つはポスト社会主義人類学、もう 1 つは「西欧」と「東欧」をめぐる地政学的な想像力についての学際的な研究分野です。1989 年の「東西冷戦」の終結以降、洋の東西をめぐる地政学的な想像力は過去のものとなったように思われましたが、2010 年代半ば以降のロシアによるクリミア半島併合やウクライナ侵攻などの出来事をきっかけに、こうした想像力が再び強力な喚起力を伴って人々の心を捉え始めています。チェコもその例外ではなく、スロヴァキアを介してウクライナに接するその地政学的なポジションから、こうした想像力の影響を受けやすい地域と言えます。実際、チェコの人々は自らが暮らす地域を、19 世紀半ば以降、「西欧」と「東欧」のあいだに位置する「中欧」と名づけ、「中欧人」としてのアイデンティティを育んできました。1989 年以降は、「西欧への回帰」という標語に見られるように、「東欧」によって奪われた「西欧」性を取り戻すという物語が、ポスト社会主義（以後）の時間・空間の編成に大きな影響を与えてきました。これまでに私は、ポスト社会主義（以後）の時間・空間がこうした地政学的な想像力によっていかに支えられてきたのかを明らかにしようと試みてまいりました。

現在の私の関心は、① 2010 年代半ばの難民危機を背景に V4（ヴィシェグラード四か国）と呼ばれる中東欧諸国（ポーランド、チェコ、スロヴァキア、ハンガリー）で急速に進行した政治の非リベラル化、さらには ② 2020 年代前半のコロナ禍やロシアによるウクライナ侵攻を背景とする排外主義的言説・情動の再編など、2010 年代半ばから 2020 年代前半にかけてのチェコ社会に生じたドラスティックな変容をいかに捉えるかという点にあります。そしてこのテーマこそ、百瀬フェローシップにおいて私が取り組もうとしている課題となります。

この課題を私のこれまでの研究と関連づけますと、その主眼はポスト社会主義以後の時間・空間が編成される論理を明らかにすることとなります。ポスト社会主義以後とは、ポスト社

会主義に対置される概念であり、私はこれまでの研究のなかでポスト社会主義を、社会主義時代の記憶が現在の「われわれ」の位置を特定する際にもっとも重要な参照元とされる時間・空間と定義し、ポスト社会主義以後を、社会主義時代の記憶がそうした特権的な役割を喪失しつつある時間・空間と定義してまいりました。しかし、ポスト社会主義以後において社会主義時代の記憶が完全にその役割を失ってしまったというわけではなく、むしろ社会の最深部にしぶとく潜在し、思わぬ形で現在の政治・文化現象に影響を与え続けているものと考えております。百瀬フェローシップのもとで研究させていただくこの一年間では、社会主義時代をはじめとする過去の記憶との葛藤や折衝の痕跡を射程に収めつつ、2010 年代半ば以降の政治の非リベラル化や排外主義的言説・情動の再編といった新たな政治・文化現象を、人々の日常的な生活実感をたよりに解明するための視点を探し当てられればと考えております。

百瀬フェローシップの理念に則り、微力ながら中東欧研究の発展に貢献できるよう、全力で研究を進めてまいる所存です。一年間、何卒、宜しくお願い申し上げます。

専任研究員・助教セミナー

専任研究員・助教セミナーが以下のように開催されました。

2024 年 9 月 12 日　松本祐生子

報告：ソ連の都市裁判からみる独ソ戦：身体と感情のあり方について

コメンテータ：立石洋子（同志社大学）

このペーパーは 1943 年から 1947 年にかけて、つまり独ソ戦期と戦後にソ連のロシア（共和国）、ウクライナ、ベラルーシ、ラトヴィアの各都市で開かれた約 20 の都市裁判の中で、映像が公開されている 6 つの裁判について検討したものです。ソ連軍によって主導され、市民が証人や傍聴人として多数参加し、裁判の後には群衆が集まる広場で被告となったドイツ軍兵士の公開処刑が行われたこの「劇場型」裁判は、市民にとっての報復の場であったと位置づけられてきました。こうした先行研究を踏まえながら、このペーパーは法廷や処刑時の映像に詳細な分析を施して裁判記録に記載されなかったものをすくい上げ、死者への法医学調査、性暴力に関するこれまで取り上げられてこなかった文書も用いて複合的に光を当てます。裁判に対する戦後の政治的・社会的隠蔽があったことや、当局が感情表現を統制しつつ裁判での市民の報復の暴走を抑制したことが明らかになり、先行研究における裁判記録の扱いが相対化されるのです。

コメンテータからは、文書や映像資料の解釈にはじまり、裁判映像の制作・受容の過程から同時代のメディア報道はじめ裁判の社会的影響を問うものまで、論考全体にわたって非常に丁寧な質問・コメントがなされました。裁判の性質の変化を見るにあたって時代だけではなく地域差も考慮する必要がある等、いくつもの重要な問題提起を通じて報告者との生産的な対話がなされました。フロアからは、独ソ戦という大テーマに新鮮な視点から切り込んだチャレンジや、ディテールの記述の充実ぶりが高く評価される一方、個別の論点やストーリーをどのように大きい議論にまとめ上げていくかという点について指摘がありました。報告者はレニングラード包囲の記憶に関する博士論文を現在単著として刊行すべく、まとめている

とのことで、今後は引き続き国家・都市・地方の関係を研究しつつ、戦後ソ連の社会史では手薄なジェンダー研究や中東欧史との接続も図っておられるそうです。ロシアでの文書の閲覧に大きな制限があるという困難を抱えながらも、このテーマのさらなる発展を期待させる会となりました。［安達］

2024 年 10 月 3 日　宇山智彦

報 告：Distant Neighbors: The Image of China in Central Asia and Entangled Human Mobility from the Qing Period to the Present

コメンテータ：野田仁（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 / SRC）

このペーパーは、欧米・東アジア諸国の研究者による中央アジアを含む露中間の国境地域に関する国際共同研究の成果論集のために執筆されたものです。内容は、18 世紀のカザフと清の関係から現在に至るまで、ロシア・ソ連・ポストソ連の中央アジアと新疆の間を移動した人々の認識と経験に焦点を当て、現地資料を用いて中央アジアにおける中国のイメージを探るものです。歴史的経緯を背景にした結論では現代中国を取り上げ、新疆に対して中国は植民地として従属させる態度で接しており、新疆と中央アジアの関係も貿易・交通面にほぼ限定されていて、中央アジアと中国をつなぐ架け橋となりうるその重要性を生かすことができていないと結んでいます。

コメンテータからは、新疆と中央アジアの歴史的一体性や中露の境界領域の風通しのよさの指摘に対する共感が表明され、これまで帝国間の対立から語られてきた境界地域の歴史を「越境」に焦点を当てて分析することで新疆／東トルキスタンを強い磁場として浮かび上がらせ、再検討を促した点が高く評価されました。また新疆出身者であれ、中央アジアの出身者であれ、新疆での生活や滞在を経験した後中央アジアに移住・帰還した人々の生み出した中国のイメージが一貫して概ね否定的であるという分析結果が驚きをもって迎えられ、この点に関する質問やコメントが提出されました。移民の歴史的な語りと現代中国のイメージの連続性、誰によっていつどのような状況で作られたイメージなのか、「中国」によって誰（漢人／非漢人、ムスリム／非ムスリムの区別等）／どこ（境界である新疆との関係等）が名指されているのかといった重要な問いはフロアにも共有され、熱心な議論が繰り広げられました。フロアからはイメージ形成と人の移動を結びつけて考察した方法論を高く評価する声があった一方で、認識やイメージの分析と新事実の提示という二つの作業をどのような読者に向けてどのように組み合わせるべきかについてスリリングな遣り取りがありました。報告者によれば中央アジアにおける中国認識の歴史の研究はこれまで手薄だったとのことで、今後の研究の進展が期待されます。［安達］

研究会活動

センターニュース 172 号以降、センターが主催・共催した諸研究会活動は以下の通りです（国際シンポジウムを除く）。［編集部］

7月22日　Survival Strategies Seminar　Siarhei Bohdan (University of Regensburg / SRC) “The Global History of Islamic Revolutionary Guards: (Post-)Soviet Episodes”

7 月 23 日　SRCW/CGR 実社会のための共創セミナー　鈴木英生（毎日新聞オピニオン編集部）「石丸現象とメディア：ポピュリズムか、絶望か？」

7 月 25 日　Lecture Series 'Ukraine and the World in Crisis'　Olena Nikolayenko (Fordham University / SRC) “Women's Participation in the Russia-Ukraine War”

7 月 26 日　Lunch Talk　Roman Katsman (Bar-Ilan University / SRC) “Jerusalem Syndrome, or the History of the 90s in Seven Pages”

7 月 29 日　RCAST Security Seminar (Tokyo)　Olena Nikolayenko (Fordham University / SRC) “Women and Revolutions in Ukraine and Belarus”

8 月 6 日　SRC Seminar　Kirill Postoutenko (Bielefeld University, The University of Helsinki) “From Wandering Jews to Rootless Cosmopolitans: Conceptual Foundations of Racist Othering in European, Russian and Soviet Culture”

8 月 8 日　中村・鈴川基金奨励研究員報告会　宇野 真佑子（東京大学大学院博士課程）「1990 年代クロアチアにおける第二次世界大戦の記憶と民族間関係」

8 月 9 日　ワルシャワ蜂起 80 周年記念映画上映会・講演会　吉岡潤（津田塾大学）「ワルシャワ蜂起を抱きしめて：ポーランドの戦争と平和」、映画『ワルシャワ蜂起』ヤン・コマサ監督、2014 年

8 月 19 日　SRC Special Seminar　“History Meets Linguistics”　Brent Vine (Professor Emeritus, UCLA) Lecture1: “What Is Indo-European Linguistics? And Why Should We Care?”; 横山恒子オリガ（カリフォルニア大学ロサンゼルス校名誉教授）「Lecture 2: 日露混血児が生きた戦後のハルビン」、「Lecture 3: 話者から言語学研究者への経路」

8 月 23 日　中村・鈴川基金奨励研究員報告会　李博聞（京都大学大学院博士後期課程）「ニコライ・ザボロツキーの農業未来図：『果実の戴冠』における環の詩学」

8 月 26 日　「大国主義の現代史」科研研究会（東京）　澤江史子（上智大学）「トルコの大国主義を国際政治のヒエラルキー構造に位置づけて理解する」、中溝和弥（京都大学）「インド 2024 年総選挙と大国化のゆくえ」、赤尾光春（国立民族学博物館）「ポスト・マイダン期におけるウクライナの風刺文化と国民意識の形成」

9 月 3 日　三者共催セミナー　「国際関係の変化の中で日本と中央アジアの交流を考える」宇山智彦（SRC）「中央アジアの国際関係の変化と日本の役割」、中馬瑞貴（ロシア NIS 貿易会ロシア NIS 経済研究所）「中央アジアのビジネス環境の変化と新たな可能性」

9 月 5 日　Survival Strategies Study Seminar　"Diverged Fates of Tatars in the Far East" Renat Bekkin (Independent Scholar / SRC) "Turkic-Tatar Emigrants in the Far East and the Case of the Idel-Ural Committees (1936)," Sayoko Numata (Tokyo University of Foreign Studies) "'We are us, that's all': Tatar Migrants Practicing Culture as a Process of Home-Building in Turkey"

9 月 9 日　SRCW/CGR 実社会のための共創セミナー　星野真（駒沢大学）「相互依存と平和：経済は政治を超えるのか？」

9 月 17 日　セミナー　Андрей Соловьев (Independent Scholar) " К эволюции стиля русских литературных путешествий XVIII века "［アンドレイ・ソロヴィヨフ「18 世紀ロシアの旅文学のスタイルの進化について」］

9 月 20 日　Lunch Talk　Renat Bekkin (Independent Scholar / SRC) "Jihad in Official Islamic Discourse in Russia during the Russian-Ukrainian War"

9 月 20 日　SRCW/CGR 実社会のための共創セミナー　樋川和子（長崎大学）「核兵器不要の世界に向けて」

9 月 20 日　公開講演会　ウルフ・ディビッド（SRC）「ハルビンの物語：ひとつの終章」

10 月 1 日　SRC セミナー　野田仁（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 / SRC）「帝国のあいだの秩序：露清間の国際集会裁判の事例」

10 月 7–8 日　International Workshop with New York University　"Buryatia: Bridging Siberia, Russia, and Eurasia" Panel 1: Natsagdorj Battsengel (Mongolian Academy of Science) "Cross-border Marital Relations between the Mongolian Subjects of the Manchu and Russian Empires in the 18th Century," Ayur Zhanaev (University of Cambridge) "Transcultural Networks at the Twilight of Empires: The Case of Tsogto Badmazhapov (1879–1937) and the Alashaa Banner of Inner Mongolia"; Panel 2: Chechesh Kudachinova (Freie Universität Berlin) "Colonialism and the Construction of Indigenous Cannibalism in Late Imperial Siberia," Nikolay Tsyrempilov (Nazarbayev University, Kazakhstan) "Christianization of the Buriats and the Dymbilov Affair, 1841–1848"; Panel 3: Takehiko Inoue (Osaka Kyoiku University) "Bridging Eurasian Buddhist Societies: Khambo-lama Choinzon-Dorzhi-Iroltuev's Grand Tour at the Turn of the Twentieth Century," Irina Garri (Institute for Mongolian, Buddhist and Tibetan Studies SB RAS, Ulan-Ude, Russia) "Following the Journey of Gombozhab Tsybikov," Sayana Namsaraeva (University of Cambridge) "Material Heritage to Share? Transborder Social Life of a Sandalwood Buddha through Time and Space across Asia"; Panel 4: Baigal Khuasai (Institute for the Study of Nomadic Civilizations, Mongolia) "Narratives of Resilience: Transformation of Üliger in the Buryat-Mongolian Cultural Revitalization in Inner Asia," Galina Dondukova (Institute for Mongolian, Buddhist and Tibetan Studies SB RAS, Ulan-Ude, Russia) "The Epic of King Gesar / Geser: The Buryat Versions in the Context of Global Studies of the Epic," Justine

Buck Quijada (Wesleyan University) “The Academic Study of Buryat Shamanism: Changing Roots of National Tradition in the Late Soviet Period”; Panel 5: Griffin Creech (University of Pennsylvania) “The Unmaking of Buryat Citizenship in Northern Mongolia, 1928–1930,” Zumber Orluud (Showa Women’s University) “Mongolian Terms for “Sovereignty”: Focusing on the Material from Mongolia and Buryatia in 1910–1920,” Buren Borjigin (Hokkaido University) “Mongolian Nationalism and Intellectuals in 1911: The Case of Almas Ochir and Haisan”

10 月 10 日　SRC セミナー　Современный русский постколониальный роман (дискуссия с участием писателя Рената Беккина (Independent Scholar / SRC), автора романа ≪Ак Буре . Кры мскот атарская сага≫и профессора Дайске Адати (SRC))［レナト・ベッキン「現代ロシア・ポストコロニアル小説」］

10 月 12 日　JIBSN セミナー 2024（与那国）「境界地域のなかに光をみる」 糸数健一（与那国町長）、星京子（標津町）、一宮努（対馬市）、石橋直巳（根室市）「（セッション 1）砦とゲートウェイ：境界地域の課題」、田島忠幸（与那国町）、前泊正人（竹富町長）、金子隆（小笠原村）、久保実（五島市）、今野直樹（礼文町）「（セッション 2）地域のグローバルリスクを考える」

10 月 16 日　生存戦略研究セミナー（東京）　Siarhei Bohdan (University of Regensburg / SRC) “Where There Is More of God? Revolutionary Islamist Iran and Its Partners in Moscow and Pyongyang (1979–1991)”

10 月 17 日　SRCW/CGR 実社会のための共創セミナー　西田充（長崎大学）「ポスト冷戦後における核兵器のグローバルリスクとは？」

10 月 17 日　生存戦略研究セミナー（東京）　Siarhei Bohdan (University of Regensburg / SRC) “No Place for Neutrality? Belarus and the Conflict in Eastern Europe (2014–2024)”

10 月 18 日　EES/SRCW スペシャルセミナー　松里公孝（東京大学）「ウクライナ戦争と旧ソ連圏」

10 月 21 日 –11 月 11 日　2024 年度 公開講座　「シルクロード：交差する時間・空間・ディシプリン」 西村陽子（東洋大学）「20 世紀初頭のシルクロード探険隊の考古調査：独・露・英各国調査隊が残した画像記録と現況」、海野典子（大阪大学）「ドゥンガン人の来た道：中央アジアに移住した中国ムスリムの末裔たち」、諫早庸一（SRC）「21 世紀のシルクロード論争：黒死病はどこから来たのか」、中村和之（函館大学）「北東アジアのシルクロード：蝦夷錦の来た道」、宮崎千穂（静岡文化芸術大学）「民族興亡の歴史と旅：井上靖「古代ピャンジケント」（1966）を読み解く」、小野亮介（東京外国語大学）「アジア主義的連帯に至る道：トルコ独立戦争期における第 0 代大使内田定槌とその周辺」

人事の動き

研究員・事務職員の異動

中嶋　奏子　事務補佐員　2024 年 8 月 31 日（退職）
上原　直子　事務補佐員　2024 年 8 月 31 日（退職）

村上　智見　特任助教　　2024 年 9 月 30 日（退職）

学界短信

ポストソ連メロドラマの国際共同研究プロジェクトが本格始動

危機的な国際情勢を受けて「ロシア」と「文学」にかたよってきたこれまでの旧ソ連（圏）の文化研究の見直しが急務となっているが、広い範囲にわたって深く張りめぐらされた根を調べるようなこうした本質的な作業のためには、ある程度の長期にわたる共同作業と、バラバラになりがちな専門家たちの仕事を統一的なパースペクティブのもとにまとめあげる方法論が必要である。こうした問題意識のもと、筆者は現代文化を理解するためのキー概念として近年注目を集めているメロドラマから当該地域における文化と政治の関わりを明らかにすることができるのではないかと考え、国内外の研究者と共同研究の構想について話し合ってきた。

ここにいたるまでの共同研究の経緯については ASEEES の広報誌で紹介したが、Marina Balina 教授（イリノイ・ウェズリアン大学）とは以前からロシア・ソ連のメロドラマ文化の共同研究を行っており、2022 年度に夏期シンポジウム共同組織した（その模様についてはセンターニュース 166 号の記事を参照）。さらに 2023 年度の外国人招へい（FVFP）教員としてセンターに滞在した Mark Lipovetsky 教授（コロンビア大学）、現在ともにセンターの共同研究員を務めてくださっている北井聡子准教授（大阪大学）、古宮路子講師（東京外国語大学）の協力を得て、センターではおそらく初めてとなる科研費「国際共同研究加速基金（海外連携研究）」の助成を 2023 年秋から 5 年間の予定で受けることができた。さらに昨年の ASEEES フィラデルフィア大会で北井・バーリナ両氏と筆者がロシア・ソ連のメロドラマ文化における脱植民地化をテーマにしたパネルを組織したさい、Ilya Kukulin、Maria Mayofis 夫妻（アマースト大学）、Boris Noordenbos（アムステルダム大学）といった強力な現代文化研究者と会合を持つことができた。以上のメンバーを中核として、オランダやドイツ・旧ソ連（圏）（ポーランド・アルメニア・ラトビア・リトアニア）の若手・中堅研究者にも声をかけていただき、ポストソ連のメロドラマ文化の国際共同研究グループが発足した。地理的

多様性だけではなく、参加者の研究テーマもポーランドのLGBTQから中東欧の文化的記憶、ヨーロッパにおけるムスリムのナラティヴまで多岐にわたる。

グループの活動は毎月1回ペースで開催しているオンラインセミナーをベースにしている。ここでは本年3月と5月にそれぞれセンターとコロンビア大学で開催した催しについて報告を行う。

3月19日にノーデンボス准教授を札幌に招へいし、科研メンバーの北井准教授・古宮講師（当時は東京大学助教）をコメンテータに迎え、プロジェクトの立ち上げとなるワークショップを開催した。すでに2回開催されていたオンラインセミナーでの議論を踏まえ、東欧における文化的記憶と陰謀論の関係を研究する国際共同プロジェクトを率いるノーデンボス氏の専門と比較することで、ポスト社会主義空間におけるメロドラマ研究の論点を整理することが目的だった。

当日は筆者がこれまでのメロドラマ研究史の概観とプロジェクトの説明を行った後、ノーデンボス氏が陰謀論の研究史を明快に整理するとともに、ポストソ連時代の映像文化における陰謀論を具体的に分析した。日露における陰謀論の比較、陰謀論とメロドラマにおける信じることの位置づけ、視覚性、ナラティヴの類型性や時間といった点での両者の比較、感情・情動研究の導入の必要など議論は大いに盛り上がった。メロドラマと陰謀論のあいだで多くの共通する研究トピックが見いだされ、今後のプロジェクトの発展の基礎をつくることができた。また関連するノーデンボス准教授の講演会「陰謀論的記憶：ポスト社会主義ヨーロッパにおける疑いの文化」が3月24日に東京大学本郷キャンパスで開催され、日本ではほとんど研究がないこのテーマをめぐって参加者たちから強い関心が示された。

すでに何回か来日しているノーデンボス准教授は日本の研究者との交流や初めて訪れた札幌がすっかり気に入ったようで、再来日にも強い意欲を示している。今後の共同研究を進める上で上々のスタートを切ることができた。

続く5月8日には場所を研究協力者のリポヴェツキー教授が教鞭を執るコロンビア大学に移し、ソ連のメロドラマの遺産と題するシンポジウムを行った。科研から古宮氏が引き続き参加、北井氏は諸事情により参加できなかったものの、社会主義リアリズム研究の日本における第一人者で以前からご協力いただいている平松潤奈准教授（東京大学）の登壇がリポヴェツキー教授の熱望により実現して、心強い思いでニューヨークに旅立った。ところがアメリカはちょうど反イスラエルのデモ活動が高まりを見せていて、筆者が到着したその日に会場として予定していたスラヴ諸語学科のある建物が学生たちによって占拠されてしまった。5月1日の別のシンポジウムはリポヴェツキー教授のご自宅に場所を移して（！）何とか開催されたが、その後もキャンパスが封鎖される緊迫した状況が続いた。同教授のはからいでキャンパスの外にあるCasa Hispanicaを会場として借りることができ、開催にこぎつけたのだった。

シンポジウムは筆者による基調講演で幕を開け、リポヴェツキー教授や平松・古宮両氏のほか、以前からメロドラマの共同研究に協力してくださっているSerguei Oushakine教授（プリンストン大学）の報告も行われた。プリンストン大学からはさらにYuri Leving、Oleg Lekmanovの両氏が参加された。こうしたスターたちに加え、コロラド大学ボルダー校のAnastasiya Osipova准教授、コロンビア大学のポスドクTatiana Efremova氏、大学院生Yulia Kim氏といった若手の報告や議論が聞けたことも収穫だった。現代ロシアにおけるソ連の文

化的記憶をテーマとして、ノスタルジーと結びついた現代映画のソ連表象、境界地域とジェンダーの関係についてのソ連・ロシア映画の比較、戦争の記憶と表象、ソ連の文学・映画におけるメロドラマ的実践といった多様なトピックが論じられた。記憶やジェンダー・身体・情動など文化研究の潮流を反映した問題設定が多かったように思うが、戦争や暴力、安全保障といった話題にはウクライナ戦争の影を感じないわけにはいかなかったし、またメロドラマ（とアイロニーや不信との関係）がもたらす距離や、そもそもが前近代の破片の寄せ集めでできたと言えるメロドラマの根源的な断片性など、単純に「共感」で一括りにされがちなメロドラマの複雑さに目を向ける機会となった。

コロンビア大学でのシンポジウムを終えて
笑顔の参加者一同

報告や議論を通じてソ連や現代文化に関する情報量に驚かされたが、これにはロシア語ネイティヴかそうでないかという違いは当然としても、電子媒体で資料にアクセスできる環境面がかなり大きいと感じた。コロンビア大学が封鎖されていたため、資料収集は必ずしもスラヴ文化研究を専門としていないニューヨーク公共図書館で二次資料中心に行うことになったのだが、それでも日本からは閲覧できなかった雑誌論文や研究書を市民が簡単にダウンロードできてしまう環境には圧倒され、国内での整備の必要性を痛感させられた。一方で現代文化の一次資料はインターネットを通じて無料あるいは比較的安価に入手できるものも多いようで、この面では情報共有を進めることによってアメリカとの研究環境の隔たりはカバーできるし、世界的な研究ネットワークが広がる余地は大いにあるだろう。

苦境にある日本チームに同情して到着直後にご自宅への食事会に呼んでくださったほか、リポヴェツキー教授のサポートは毎日のように開催されている学術イベントへの招待から資料収集さらには市内観光にまで及び、そのご厚意が心に沁みた。大学の同僚に Irina Reyfman 教授がいらっしゃり、そのご自宅でのパーティにもお招きいただいた。ロシアの文学・文化において重要な役割を果たした決闘についての決定的な著書の著者として尊敬している方に、思いがけずお目にかかることができてしまったのである。なおこのレイフマン教授を受入教員として東京外国語大学の巽由樹子准教授がサバティカルを利用して滞在されており、日本チームもお世話になったが、何ともうらやましい環境である。研究業績が優れているのはもちろん面倒見の良く快活なリポヴェツキー教授の周りには、いつも人が集まっていた。アレクサンドル・ゲニス氏（沼野充義教授らとの交流を懐かしく思い出されていた）はじめほとんど伝説上の人物だと思っていた人々と話す機会にたくさん恵まれたし、ポスドクや大学院生たちがそうした交流の輪に自然に入っていたことがまた印象的だった。進展中の研究について何人かが報告、参加者と率直に議論する会も定期的に開かれていて、研究交流が広がり、受け継がれてゆくための場が意識的に、そして無理のない（少なくともそう見える）かたちで組織されている。

ニューヨーク市内ではウクライナ戦争や反イスラエル運動の影響がいたるところで感じられたし、現代オペラや現代音楽のコンサートでも政治が剥き出しの形で表現されているのを目にした。その後筆者はケンタッキー州レキシントンのバーリナ教授のご自宅に呼んでいただき、教授のふるまってくださる料理のおもてなしを受けながら、豊かな自然を感じる余裕もないほど論集編集と論文執筆のイロハを叩き込んでいただいた。その際もやはりアメリカのスラヴ研究の状況やウクライナ、イスラエルの情勢が話題になり、もはや文化と政治との結びつきから目を背けて研究することはできない時代にいるのではないかと、そんな思いを強くする訪問ともなった。メロドラマのプロジェクトはもちろん、今後の国内外の研究一般について多くの示唆を得ることができた。［安達］

INCSA がダラム大学で立ち上げ

19 世紀研究初の国際学会 The International Nineteenth-Century Studies Association (INCSA) の第一回大会が 7 月 10 日から 12 日の三日間、立ち上げの中心となったイギリスのダラム大学で行われた。ハイブリッドの大会には参加者が 35 か国から対面だけで約 200 名、オンラインを合わせると 300 名近くに及んだという。筆者は運営関係者（＋パネル司会）として参加したが、センターの共同研究員としてもお馴染みの神竹喜重子氏（東京藝術大学）と古宮路子氏（東京外国語大学）がそれぞれ対面とオンラインで登壇していたほか、現地では福井祐生氏や清水真伍氏らポスドク・大学院生の姿も見かけられた。会場はダラム大学の教育学習センターをメインとしてその周辺の他学部の建物を組み合わせたコンパクトな配置で、徒歩 10 分程度の場所にある大学宿舎も含めて移動は楽だった。

記念すべき大会はゾーン会長のあいさつで始まった。“The Nineteenth Century Today: Interdisciplinary, International, Intertemporal” という大会のテーマにも含まれているキーワード Interdisciplinary, International, Intertemporal が強調され、その後も機会あるごとに繰り返されていた。穿った見方をすれば、従来の英語圏の 19 世紀研究でこれらを達成することがいかに難しかったかということの裏返しかも知れない。実際今大会でもヴィクトリア朝の文化に関する知識が前提とされる報告も多く、英語圏の専門家が目立ち、ディシプリンとナショナリティの面では（打ち明けてしまうと）会話に入りにくいところも確かにあった。

ダラム大学の実質的な学長 オブライエン教授の開会の言葉

ただそれを上回る変化への意志と兆しは随所に感じられた。テーマは文学だけではなく音楽・美術・舞台芸術さらには 20 世紀のメディアである映画を扱ったものと幅広く、さらに医学や犯罪、写真技術や地図といった狭い意味の「文化」の範疇に入りきらないトピックに真正面から取り組む報告やパネルもあった。ジェ

ンダーやLGBTQ、（脱）植民地主義への関心と知識はほぼ共有されていたように思う。二つの基調講演はともに欧米の博物館等における知の収集と展示の脱植民地化、そして失われた歴史や記憶の回復に関わるものだった。公開セッションでは環境批評や暴力がテーマになるなど、人文科学の新しいトピックや方法論を積極的に取り入れる姿勢が目についた。アカデミズムと現代を生きる人々をつなぐ存在として美術館・博物館や演奏家などとの協力関係も重視されていて、最初の基調講演はロンドンのヴィクトリア＆アルバート博物館（V&A）の新しい施設V&A Eastの館長が行い、公開セッションにはジョージ・ルーカス博物館のキュレーターが招かれて多様なメディアにおけるSFの暴力描写の展開を手際よく解説していた。ゾーン会長の専門分野である音楽関係もさすがに充実しており、プログラムにはレクチャー・リサイタルが5つも含まれていた。総じて、この種の学会にありがちな19世紀への郷愁めいたものが感じられなかったことは印象的だった。この時代とのけっして近くはない距離を冷静に見つめながら、そこからアクチュアリティを読み取ろうとする姿勢にはアカデミズムにとって生産的な危機感すら漂っていた。

アフリカや中近東、南米を扱った報告に混じってロシア関係の報告は事前に予想していたより数が多かったし、会場にはモスクワ高等経済学院の有力な若手研究者の姿もあった。他地域の研究者との政治的な衝突があったようには見えない。ただ筆者も参加した議論の中で、オリエンタリズムの内面化という観点からオスマン帝国とロシア帝国の比較が話題になった際、ロシアの研究機関所属の、ただしロシアを専門とはしていない研究者が「もっといろいろな問題があるのにロシアと言えば帝国主義が問題にされるのは気分がよくない」と発言したことには複雑な思いがした。一方ロシア以外のスラブ・ユーラシアに関する報告はほとんどなく、また東アジアについての報告数もわずかだった。このような状況を踏まえて、東アジア地域にあってスラブ・ユーラシア研究とINCSAをつなぐハブとして当センターに熱い視線が注がれていることがよくわかった。

開催期間中には毎夕イベントが用意されていた。とくに世界遺産のダラム大聖堂での聖歌（文言もいろいろ興味深い）、そして隣接するダラム城に場所を移して開かれた夕食会は、そこでのゾーン会長の配慮の行き届ききったスピーチと併せつよく印象に残った。三日間とも薄曇りで肌寒いくらいだったが、ダラムは落ち着いた静かな街で、行きかう人々も親切で過ごしやすかった。帰路に乗ったタクシーでは運転してくれていたのが近隣のニューカッスル在住、ルーマニア出身のクリミア・タタールの若者とわかり大いに話が弾んだ。

懇親会でのゾーン教授（右端）のスピーチ。
左端は運営委員を務める許教授（台湾・政治大学）

次回は2026年、ワシントンに場所を移して行われる。スミソニアン博物館が主催し北米の団体INCS (Interdisciplinary Nineteenth-Century Studies) と合同で行われる大会は、400人規模になるという予想もあるようだ。英語とスペイン語の併用が計画されているという話も聞くから、多様性への配慮がいっそう進むだろ

う。学会誌とブック・シリーズの出版計画も軌道に乗りつつあり、次回大会ではまた新たなINCSA の姿が見られるに違いない。［安達］

学会カレンダー

2024 年	11 月 2 日	2024 年度内陸アジア史学会　於龍谷大学大宮キャンパス https://nairikuajia.sakura.ne.jp/SIAS/events/index.htm
	11 月 9–10 日	ロシア・東欧学会 2024 年度研究大会　於早稲田大学 https://www.jarees.jp
	11 月 15–17 日	日本国際政治学会 2024 年度研究大会　於札幌コンベンションセンター　https://jair.or.jp/event/2024index.html
	11 月 21–24 日	ASEEES (Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies) 2024 Annual Convention　於ボストン https://www.aseees.org/convention
	12 月 18–19 日	スラブ・ユーラシア研究センター 2024 年度冬期国際シンポジウム 於 SRC
2025 年	1 月 8–10 日	CESS (Central Eurasian Studies Society)-ESCAS (European Society for Central Asian Studies) Lisbon Conference 2025 https://centraleurasia.org/cess-escas-lisbon-conference-2025/
	6 月 5–8 日	ESCAS (European Society for Central Asian Studies) 2025 Regional Conference http://www.escas.org/next-conference/2025-samarkand-conference/
	7 月 21–25 日	ICCEES (International Council for Central and East European Studies) XI World Congress　於ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン　https://www.iccees2025.org
	8 月 25–29 日	XVIIth International Congress of Slavists　於ソルボンヌ大学 https://mks-paris.sciencesconf.org

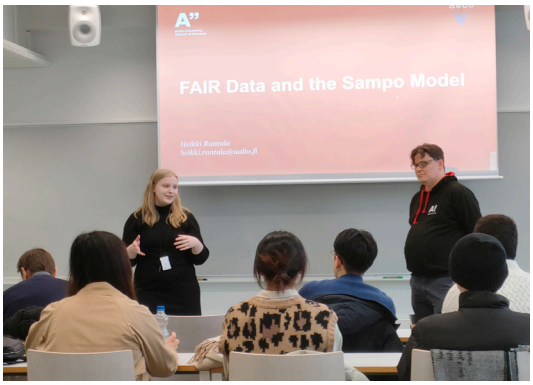
［編集部］

大学院だより

OGGs・NJE3 コース「SDGs 実習：北方圏の歴史・言語・美術（NJE3）」の合同授業がヘルシンキ大学（フィンランド）で開催

北海道大学は持続可能な社会の実現に向けて、様々な専門領域の教員と多様な関心を持った学生が参画する分野横断型の国際共修プログラム One program for Global Goals（略称 OGGs オッグズ）を組織して、SDGs に代表される地球規模の課題を取り上げています。3 つのコースのひとつ NJE3 コースは、気候変動や歴史文化の多様性など地球規模の問題が集積する北方圏を対象として、「環境評価」「文化的多様性」「土壌と生産」「地域資源開発」「防

災管理」の分野横断的な重要課題を扱います。前身となるRJE3時代はロシアの各大学と交流していました。センターは田畑伸一郎名誉教授が中心となって運営に大きく貢献してきましたが、ロシアのウクライナ全面侵攻を承けて名称や内容が変更された現在も引き続きコースを支えています。



ヘルシンキ大学での授業で
現地の研究者・学生と交流

3月11日～13日にかけてフィンランドのヘルシンキ大学で「SDGs実習：北方圏の歴史・言語・美術（NJE3）」の合同授業が行われ、コース長（当時）の瀬戸口剛教授、アイヌ・先住民研究センターの加藤博文教授らとともに、センターからは安達准教授が講師として参加しました。3月11日の授業で安達准教授は “Rethinking Russian Culture through the Lens of Melodrama Studies” というタイトルのもと、ロシア・ソ連の大衆社会におけるジェンダーや階級、個人・家族・社会の関係といった話題に広く触れました。ヘルシンキ大学からはTintti Klapuri講師が “Sámi Literature in the Soviet Union and Russia” という講義を行い、サーミ文学を取り上げて北方圏の先住民の歴史と文学をポストコロニアリズムと環境批評の観点から紹介しました。ヘルシンキ大学・北海道大学の学生・教員からなる20名ほどの参加者は熱心に授業に参加し、活発な質疑応答が行われました。

クラプリ氏は文学院の小椋彩准教授の招へいにより昨年来日され、9月末にはセンターでロシア・中東欧のエコクリティシズムに関する講演を行っています。今回も菅井健太准教授（文学院）と安達にヘルシンキ大学やフィンランド国立図書館付属のSlavonic Libraryを案内してくださいました。ご所属先では飲み放題の美味しいコーヒーを飲みながらご同僚と語らう機会を設けてくださったほか、図書館では調査にいらしていた早稲田大学の坂庭淳史教授とお知り合いになっていました。

ヘルシンキ大学側の参加者は加藤先生のご専門である考古学の関係者が多かったようです。両大学の専門の異なる教員・学生との交流は刺激的で、今後の研究・教育交流に期待のできる訪問となりました。［安達］

編集室だより

Acta Slavica Iaponica

編集長を引き継ぎました諫早庸一です。本誌の充実に努めてまいりますので、どうぞ宜しくお願い申し上げます。第45号に関しましては、現在編集作業が進んでいます。あわせて第46号に関しましても、7月16日に投稿が締め切られ、論文9本、研究ノート1本の投稿がありました。こちらも現在、査読プロセスが進行しているところです。［諫早］

会議

センター協議員会

2024 年度第 1 回協議員会　7 月 22 日（オンライン開催）
1. 令和 5 年度支出予算決算書（案）について
2. 令和 6 年度支出予算配当書（案）について
3. 教員人事について
4. 教員の再雇用について
5. 規程の一部改正について

［事務係］

みせらねあ

専任研究員消息

ウルフ・ディビット研究員は、6/6–7/5 の間、資料収集及び Bielefeld Research Colloquia in History プログラムでの講演のため、ミュンヘン、ビーレフェルト（ドイツ）、ニューヨーク、バークレー（アメリカ）に出張。また 9/7–9/20 の間、資料収集のため、ケンブリッジ、ニューヨーク（アメリカ）に出張。

岩下明裕研究員は、6/22–7/3 の間、アダム・ミツキェヴィチ大学での講演、研究打ち合わせ、資料収集、シンポジウム出席（6/28-29、7/1-2）のため、ポズナン、グダンスク、ワルシャワ、スウビツェ（ポーランド）、フランクフルト・オーダー（ドイツ）に出張。

長縄宣博研究員は、6/29–7/14 の間、“Summer School 2024: The Archives of Islam in the Russian Empire (16th-Early 20th Centuries)” 出席、事前打合せ、資料収集のため、ウィーン（オーストリア）、バクー（アゼルバイジャン）に出張。

安達大輔研究員は、7/8–7/14 の間、INCSA Conference 2024 “The Nineteenth Century Today: Interdisciplinary International Intertemporal” 及び INCSA 編集者会議出席のため、ダラム（イギリス）に出張。

宇山智彦研究員は、8/5–8/13 の間、SATREPS「スマートマイニング＋による環境破壊を引き起こさない持続可能な環境調和的鉱山開発システムの構築」計画策定調査のため、アスタナ、オスケメン（カザフスタン）に出張。

服部倫卓研究員は、8/28–9/6 の間、面談、資料収集、講演会 “The Dictators Who Want to Run the World” 出席 及び研究打ち合わせのため、ロンドン、オックスフォード（イギリス）に出張。

［事務係］

目　　次

研究の最前線 ……1

NYU×生存戦略研究国際ワークショップ「ブリヤーチヤ：シベリア・ロシア・ユーラシアの架け橋」開催される／SRC冬期国際シンポジウムの予告／2024年JCREESサマースクール開催報告／「東ユーラシア研究」プロジェクト（EES-SRC）／グリーンランドにおける資源開発に関する現地調査／横山恒子オリガ先生およびブレント・ヴァイン先生のセンターご訪問／ウクライナ公共放送局 Suspilne Ukraine の代表団の訪問／2024 年度中村・鈴川基金奨励研究員の決定・滞在／第4回百瀬フェローの決定／専任研究員・助教セミナー／研究会活動

人事の動き ……20

研究員・事務職員の異動

学界短信 ……20

ポストソ連メロドラマの国際共同研究プロジェクトが本格始動／ INCSA がダラム大学で立ち上げ／学会カレンダー

大学院だより ……25

OGGs・NJE3 コース「SDGs 実習：北方圏の歴史・言語・美術（NJE3）の合同授業がヘルシンキ大学（フィンランド）で開催

編集室だより ……26

Acta Slavica Iaponica

会議 ……27

センター協議員会

みせらねあ ……27

専任研究員消息

2024 年 10 月 31 日発行

編集　田宮彩也香、宇山智彦
発行者　長縄宣博
発行所　北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター
060-0809 札幌市北区北 9 条西 7 丁目
Tel.011-706-2388、706-3156
Fax.011-706-4952
インターネットホームページ：
http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/